

Title	イングランド初期印刷文化と作品受容
Sub Title	Early English printing and the reception of medieval literature
Author	徳永, 聡子(Tokunaga, Satoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Hiyoshi review of English studies). No.66 (2015. 3) ,p.37- 45
JaLC DOI	
Abstract	Medieval literary works popular in manuscript culture were not necessarily inherited by the print culture. Then which texts were chosen to be published by the first generation of printers in England? This paper offers a preliminary overview of the reception of medieval literature in England in the transitional period from manuscript to print by comparing the list of publications of William Caxton, England's first printer, and that of his follower Wynkyn de Worde. While Caxton's publishing style was largely influenced by the manuscript tradition and distinguished by his translation (especially from French prose romance), de Worde seems to have been more active than his master in not only expanding the market for religious works and romance (both prose and verse) but also cultivating a relationship with his contemporary authors.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20150331-0037">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20150331-0037</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# イングランド初期印刷文化と作品受容

徳 永 聡 子

15世紀中葉、マインツで始まったとされる活版印刷術は、ドイツ、イタリア、フランスを中心とした各都市に広がり、ヨーロッパ文化にきわめて大きな変革をもたらした。大量生産を可能にした活版印刷術は、読者層を拡大しただけでなく、書物や出版文化の性質をも変容させたことは言うまでもない。それまで手書き写本により受け継がれてきた作品は、次第に印刷本という形で世に送り出され、写本文化から印刷本文化への移行が進んだ。こうした新しい文化、時代への移行期には、必ずしも古い時代のものが受け継がれるわけではなく、なかには変化に追いつけず取り残されてしまう場合もある。とりわけ印刷術という新しいメディアが登場した時期、ヨーロッパは中世からルネサンスへの移行期でもあり、宗教や社会的な面でもさまざまに揺れ動いていた。このため写本の時代に生まれた作品が印刷本の時代にすべて継承されていったとは限らず、多くが時代から取り残され、忘れ去られていったという指摘もある。それでは印刷術の登場、印刷文化の胎動は、中世の著作の受容をどのように規定したのであろうか。このような問題意識を出発点として、本稿では、イングランド印刷の始祖ウィリアム・キャクストンとその弟子で次世代を代表するウィンキン・ド・ウォードの出版物を手がかりとし、15世紀後半から16世紀初頭のイングランドにて、初期印刷業者たちがどのような作品を継承した（或いはしなかった）のか整理を試みたい。

ただし具体的な考察に入る前に、初期印刷本を取り上げる際の留意点について触れておく必要がある。それは初期刊本の現存率である。Jonathan Green, Frank McIntyre および Paul Needham は、15世紀刊本の実際の残存率は40～60パーセントであろうという分析を発表した<sup>1)</sup>。ヨーロッパ15世紀刊本の書誌および所在情報を記録したオンライン書誌目録 *Incunabula Short Title Catalogue* には、およそ29,000版が登録されている。Green らの計算によると、この29,000版という数字は実際に出版された版 (edition) 数の半分にも満たない。特にイングランドの場合、ヘンリー八世が主導した宗教改革が及ぼした影響は甚大であった。また古い書物への無関心から行われた書物の破壊 (biblioclast) から、断片のみで伝わってきたものも少なくない。つまり、現在に残るものが当時の出版事情の全体像を示しているとは断定できないのである。こうした限界を前提としつつも、以下では現存するキャクストンとド・ウォードの出版リストから、写本から印刷本文化への移行期に、どのような出版動向を読み取ることができるのか、その一端をまとめてみたい。

イングランドに印刷術が伝来したのは、ゲーテンベルクの発明から20年ほどの時を経た1476年頃であった。ケルンで印刷術を学んだキャクストンは、英語で書かれた印刷本の嚆矢として『トロイ歴史集成』の英訳を、ブリュージュ、あるいは最新のロッテ・ヘリングの研究によると、ヘントで出版した<sup>2)</sup>。その後、ウェストミンスターへ戻ると、『カンタベリー物語』に代表される15世紀イングランドで人気を博した英文学作品を、初期の出版物として選んだ。特に最初にキャクストンが出版したのは、ページ数も少ない四つ折り判の小冊子であった。1476年から1477年にかけて、リドゲイトの小品、カトーの翻訳書といったタイトルが出版物リストに並ぶ<sup>3)</sup>。これらの作品の多くは顧客の要望に応じて、一緒に綴じられ、一冊の合冊本としても販売された。また似通った内容の合冊本が複数現存するだけでなく、同様の構成内容を15世紀の中世写本にも見出すことができ

る。中世後期、特に15世紀という時代は、チョーサーやリドゲイトらの正典化が進んだ時代である。Alexandra Gillespieらが指摘するように、キャクストンは、いわば写本工房的な書物生産の形態に倣って、顧客自身が自分の好みで選んだ作品で合冊本を製作できるような出版業を始動させた<sup>4)</sup>。つまり、印刷という新しいメディアの最初の使い手としてキャクストンが世に送り出したのは、写本文化的書物生産の特性を踏まえたものだったのである。

キャクストンの出版物の最大の特徴は「俗語」による作品がその大半を占める点にある。アンソニー・ウッドヴィルなどのパトロンによる翻訳書の刊行もあるが、キャクストン自身が手がけた翻訳書を時系列でたどると、1477年に出版した『イアソンの歴史』、1480年代の『世界の鑑』、『ブイヨンのゴドフリー』、『狐物語』、『チェスのゲーム』、『黄金伝説』、『カール大帝』、『パリスとヴィエヌス』、『王の書』、『エイモンの四人の息子』、晩年の『アエネーイス』、『ブランシャルディンとエグランティン』などがある。こうした書物の翻訳に至った背景には、パトロンや宮廷関係者の影響が認められることが少なくない。とりわけ、キャクストンが印刷したロマンス作品のほとんどは、フランス語からの散文物語であることは興味深い。ここには彼が大陸時代に足しげく通ったブルゴーニュ宮廷での流行の影響がみられると、デレク・ピアスルは指摘する<sup>5)</sup>。さらに、キャクストンがブリュージュ滞在中に取り組んだ『トロイ歴史集成』、それと対になる『イアソン歴史』の翻訳の背景には、ブルゴーニュ公国建設の歴史を、古えの英雄ヘラクレスの系統に位置付けようとした宮廷人たちの思惑が絡むとする解釈もある<sup>6)</sup>。こうしたことから、ロマンス作品の場合、先ほどのチョーサーやリドゲイトの作品とは対照的に、キャクストンは同時代のブルゴーニュ宮廷の流行や潮流を取り入れていたことが推察される。

一方、キャクストンが出版に消極的だった分野として、中世後期のイングランドで育まれた韻文ロマンスが挙げられる。Carol M. Mealeによると、13世紀後半から1535年頃までにイングランドで流通していた英語のロ

マンズは 88 点あり、その中で 21 点のみが 1535 年までに印刷本として世に送り出された<sup>7)</sup>。その中の 8 点は、キャクストンが最初に印刷した散文ロマンスで、残りの半分ほどが『ガイ・オヴ・ウォリック』、『サー・デガレ』、『獅子王リチャード』などの韻文ロマンスであった。Meale は、15 世紀から 16 世紀初頭にかけてのロマンス作品の出版を担ったのは、キャクストンではなく弟子のド・ウォードであったこと、またド・ウォードの作品選択はキャクストンとは異なっていたと指摘する。ド・ウォードのロマンス出版物には、ひと昔前に流行した韻文ロマンスの復権と、当時大陸で流行していた作品を読者に届けようとする意図が垣間見られるのである。

次に宗教書の出版に注目したい。キャクストンが宗教書を刊行するようになるのは、いわゆる時禱書や詩篇といった典礼書関係をのぞくと、ウェストミンスターに印刷所を構えてから 6 年余の歳月が経った 1482/83 年まで待たなくてはならない。15 世紀イングランドでは、1409 年のアランデルの大司教令発布後、異端は最重要問題であった。時の大司教によってその度合いは異なったものの、司教令の効力は 16 世紀初頭まで続いた<sup>8)</sup>。キャクストンが刊行した英語の宗教書は、いずれも 14～15 世紀において問題視されることなく、写本で広く普及していたものである<sup>9)</sup>。彼の宗教書の出版物リストには、リドゲイト作『聖母の生涯』、ジョン・マークの『祝日説教集』、刊行物の中で最大級の『黄金伝説』、ニコラス・ラヴが英訳、加筆し、アランデル大司教自らが普及を認可した『イエス・キリストの尊い生涯の鑑』、『四つの説教』などが並ぶ。その多くはキャクストンの次世代の印刷業者によっても、宗教改革前夜まで数多く再版された。例えば、『祝日説教集』と『四つの説教』はセットでの出版・販売が意図されていたようで、その組み合わせで 19 回も版を重ねた。さらに『黄金伝説』は 12 版、『イエス・キリストの尊い生涯の鑑』は 9 版が刊行されている。

しかしながら、中世後期に写本で読まれていた英語の宗教書の数々に比べると、キャクストンが出版したこの分野の作品はきわめて限定的である。

また同時代に人気を博していたにもかかわらず、キャクストンは印刷業の開始直後に宗教書の出版は手がけなかった。大陸に長年いたキャクストンが、15世紀後半のイングランドにおける宗教事情をどれだけ正確に把握していたかを知ることは難しいが、1483年頃以降、徐々に出版点数を増やしている点は注目に値する。推測の域を出ないものの、どのような英語の宗教書であれば安全なのかを慎重に検討を重ねたうえで、市場の獲得を図ったたのかもしれない。また Powell の研究が示すように、晩年になって得たサイオン修道院やマーガレット・ボーフォートからの後押しも、キャクストンが英語宗教書の出版を手がける際に大きな原動力となったことは十分に考えられる<sup>10)</sup>。

キャクストンとは対照的に、彼の工房を引き継いだド・ウォードの出版物は、その半数以上（57パーセント）を英語の宗教書が占めている<sup>11)</sup>。ド・ウォードが最初に出版した宗教書は、『神の子の懲らしめ』とウィリアム・フリートの『誘惑の苦悩への対処法』、続いて『愛の書』、『聖エリザベート』と『聖カタリナの生涯』といった作品である。いずれもキャクストンの出版物リストにはない。一方で、大陸由来の作品も含まれている。さらには、少し前の時代に写本で流通した『ニコデモの福音書』、『精霊の修道院』、『ケルンの三王』、『マージェリー・ケンプの書』の縮約版など、個人の観想と密接に関わりのある作品も出版している。また、ド・ウォードの宗教書の出版背景には、しばしば重要なパトロンが存在する。イーリーの司教であり、国王の顧問官となったジョン・オールコック、ダラム司教だったリチャード・フォックス、ジョン・フィッシャーといった高位聖職者である。彼らの著作を出版しただけでなく、先に触れたマーガレット・ボーフォートの要請により、ウォルター・ヒルトンの『完徳の階梯』、トマス・ア・ケンピスの『キリストに倣いて』の翻訳書など、個人の観想を促す作品を15世紀末から16世紀にかけて次々に出版した。

こうした出版物の背景には、マーガレット・ボーフォートの存在、そしてイングランド王族から特権を得ていたビルギッタ会のサイオン修道院、マ

ウント・グレイス、シーン、ロンドンのカルトゥジオ会などの修道院が少なくからぬ影響力を及ぼしていることは、これまでも指摘されてきた通りである<sup>12)</sup>。特に、ヒルトンの『完徳の階梯』に見られるように、「観想と実践の生活」(mixed life)を扱った書物が、ド・ウォード、そして彼の同時代の印刷業者が出版した宗教書を大きく特徴付けている。具体的な作品として、『シエナの聖カタリナの生涯』、『キリスト教徒の日常訓』、『サイオンの果樹園』、『聖母の鑑』、サイオン修道院の修士リチャード・ウィットフォードが著した『家長のための書』などが挙げられよう。これらの著作は、修道女たちの霊的生活を模倣する手引きとなると同時に、平信徒たちが「観想と実践の生活」、すなわち俗世での生活を営みながらも「観想と実践の生活」の両方を追求するための道を示した内容である。PowellやC. Annette Griséらが指摘するように、サイオン修道院の修士たちは修道女のために書いたとする著作を、印刷という媒体を意識的に利用し、一般信徒にも向けたものとして積極的に発信していった。そしてド・ウォードを始めとする印刷業者たちも、そうした要請に応じていったと思われる<sup>13)</sup>。

このようにド・ウォードおよび彼の同時代の印刷業者たちは、キャクストンは取り上げなかった、しかし写本では流布していた宗教書の出版も手がけつつ、16世紀に入ると「観想と実践の生活」を扱った同時代の作家の作品も積極的に取り上げ、読者層の拡大に努めた。ここには「作者と印刷業者の協同」という、向井毅が指摘する新しい出版形態の萌芽を垣間みることができる<sup>14)</sup>。中世後期から連綿と続く伝統的なテーマを引き継ぎながら、他方では、同時代の作者との連携により出版業を発展させていった様子が観察できるのである<sup>15)</sup>。

以上のことから、15世紀末から16世紀という移行期を、キャクストンとその後継者ド・ウォードの出版物から概観すると、一部には中世の作品の継承や復権がなされつつも、16世紀に入ると、作家と印刷業者の協働という新しい出版形態も見られる。一方で、書物文化が印刷本文化の幕

開けと同時に刷新されたわけではなく、15世紀末以降も写本文化は続いてきた点も忘れてはならない。キャクストン版を始めとする初期刊本を底本として転写し、制作された写本も存在する<sup>16)</sup>。また写本と印刷本が一冊のなかに綴じ合わされた書物や、ロバート・フェイビアン『年代記』の例が体現するように、同時期に写本と印刷本の両方のメディアで世に送り出された書物もある。その対象とする読者層や目的は、写本と印刷本では異なりえることもあった。だが、Julia Boffeyが喚起したように、出版文化都市として発展を遂げるロンドンでは、印刷本と写本の両方が共存する“hybrid”な書物文化が育っていた<sup>17)</sup>。今後はこうした点も踏まえ、15世紀末から16世紀初頭をひとつの時代ととらえた、さらなる具体的な書物の検証が待たれよう<sup>18)</sup>。

## 注

- 1) Jonathan Green, Frank McIntyre, and Paul Needham, ‘The Shape of Incunable Survival and Statistical Estimation of Lost Editions’, *Papers of the Bibliographical Society of America*, 105.2 (2011), 141–75.
- 2) Lotte Hellinga, *William Caxton and Early Printing in England* (London, 2010), Chapter 3; 同研究書の翻訳として、ロッセ・ヘリング著『初期イングランド印刷史—キャクストンと後継者たち』徳永聡子訳、高宮利行監修（雄松堂書店、2013年）がある。
- 3) ただし、英語で書かれた作品に特化しており、例えば、ガワーのラテン語やフランス語作品は印刷していない。また、英語で書かれたにもかかわらず、ホックリーヴの作品は、キャクストンのみならず、次世代の印刷業者によっても印刷されなかった。
- 4) Alexandra Gillespie, *Print Culture and the Medieval Author: Chaucer, Lydgate, and their Books, 1473–1557* (Oxford: Oxford University Press, 2006).
- 5) Derek Pearsall, ‘The English Romance in the Fifteenth Century’, *Essays and Studies*, 29 (1976), 56–83.
- 6) Hellinga, *William Caxton and Early Printing*, Chapter 3.
- 7) Carol M. Meale, ‘Caxton, de Worde, and the Publication of Romance in Late Medieval England’, *Library* 6th ser., 14 (1992), 283–98.



- 8) Susan Powell, 'After Arundel but before Luther: The First Half-Century of Print', in *After Arundel: Religious Writing in Fifteenth-Century England*, ed. by Vincent Gillespie and Kantik Ghosh (Turnhout: Brepols, 2011), pp. 523–41.
- 9) Hellinga, *William Caxton and Early Printing*, Chapter 17.
- 10) Susan Powell, 'Syon, Caxton, and the *Festial*', *Birgittiana*, 2 (1996), 187–207; 'What Caxton Did to the *Festial*: The *Festial*: From Manuscript to Printed Edition', *Journal of the Early Books Society*, 1 (1997), 48–77; 'Why *Quattuor Sermons*?' in *Texts and their Contexts: Papers from the Early Book Society*, ed. by John Scattergood and Julia Boffey (Dublin: Four Courts, 1997), pp. 181–95; C. Annette Gris , "'Moche profitable unto religious persones, gathered by a brother of Syon": Syon Abbey and English Books', in *Syon Abbey and its Books: Reading, Writing and Religion, c. 1400–1700*, ed. by E. A. Jones and Alexandra Walsham (Woodbridge: Boydell, 2010), pp. 129–54.
- 11) Hellinga, *William Caxton*, Chapter 17.
- 12) 注 11 に挙げた文献および, Susan Powell, 'Lady Margaret Beaufort and her Books', *Library*, 6th ser., 20 (1998), 197–240 など。
- 13) C. Annette Gris , "'Moche profitable"' ; 'The Mixed Life and Lay Piety in Mystical Texts Printed in Pre-Reformation England', *Journal of the Early Book Society* 8 (2005) 97–123; Powell, 'After Arundel but before Luther'.
- 14) 向井毅「写本アンソロジーから Sammelband へー『作品集』誕生への胎動を観察する」福岡女子大学文学部紀要『文芸と思想』71 (2007), 37–50 (40–41)。
- 15) こうした出版形態の萌芽は、同時期の他のジャンルにおいても見出すことができる。例えば、桂冠詩人ジョン・スケルトンやステイーヴン・ホーズの著作の出版について、同様のことを A. S. G. Edwards は指摘している。'Poet and Printer in Sixteenth Century England: Stephen Hawes and Wynkyn de Worde', *Gutenberg Jahrbuch*, 55 (1980), 82–88.
- 16) N. F. Blake, 'Manuscript to Print', in *William Caxton and English Literary Culture* (London: Hambledon, 1991), pp. 275–303.
- 17) Julia Boffey, *Manuscript and Print in London c. 1475–1530* (London: British Library, 2012).
- 18) 本稿は、日本中世英語英文学会第 29 回大会 (2013 年 12 月 1 日 (日) 於・愛知学院大学) シンポジウム「15 世紀イングランド文学の革新と継承」での発表原稿 (「メディア革命と中世英文学の受容」) に、加筆修正を行ったものである。

*Synopsis*

# Early English Printing and the Reception of Medieval Literature

Satoko Tokunaga

Medieval literary works popular in manuscript culture were not necessarily inherited by the print culture. Then which texts were chosen to be published by the first generation of printers in England? This paper offers a preliminary overview of the reception of medieval literature in England in the transitional period from manuscript to print by comparing the list of publications of William Caxton, England's first printer, and that of his follower Wynkyn de Worde. While Caxton's publishing style was largely influenced by the manuscript tradition and distinguished by his translation (especially from French prose romance), de Worde seems to have been more active than his master in not only expanding the market for religious works and romance (both prose and verse) but also cultivating a relationship with his contemporary authors.